

けいはんな view



トップインタビュー

国際高等研究所 副所長 赤松 玉女 氏

けいはんな未来フェス

秋の主要イベントご紹介

けいはんな発イノベーション

大阪電気通信大学、地球環境産業技術研究機構 (RITE)

けいちゃん はんちゃん なあちゃんのふるさとめぐり..... 四條畷市

けいはんな人物図鑑..... たわらコネクタを支える人たち



新理事長 挨拶

(公財)関西文化学術研究都市推進機構(以下、「当機構」)は、1978年の関西学術研究都市調査懇談会の提言を受け、1986年の設立以来、けいはんな地域の中核組織としてまちづくりを牽引してまいりました。2026年には設立40周年という節目を迎え、関西文化学術研究都市(愛称「けいはんな学研都市」)は、文化財と共存しながら我が国を代表するサイエンスシティへと発展し、約160の大学・国立研究機関・企業が集積する独自の知的創造拠点となりました。現在においても、研究成果の社会実装や産学公連携の深化、国際競争力の強化など、未来社会の創出に向けた新たな取り組みを加速しています。

こうした発展の歩みの中で当機構は、都市構想から建設、運営に至るまで一貫してその推進役を担う一方、オープンイノベーションの促進、スタートアップ支援、先端技術の実証フィールドの提供など、多様な取り組みが求められてきました。

2025年には大阪・関西万博と連携した「けいはんな万博2025」を成功裏に終え、その成果を新たなレガシーとして継承・発展させるとともに、ポスト万博シティとして社会実装を着実に進めていきます。

加えて、国立研究機関を中心に、企業、大学との連携を一層強化し、社会課題の解決と新たな価値創出の両立を目指し、革新的なイノベーションを起こすことにより、人類社会の進歩発展に貢献してまいります。

公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構 理事長
京セラ株式会社 代表取締役会長

山口 悟郎

Interview

けいはんなトップインタビュー

けいはんな学研都市の過去、現在、未来を考える「トップインタビュー」。今回は、画家として国内外で創作活動を続けてこられた一方、教育者としても長いキャリアをお持ちの赤松玉女氏（京都市立芸術大学名誉教授）です。昨年10月に公益財団法人国際高等研究所 副所長に就任されてからの活動をはじめ、けいはんな学研都市の掲げる「文化」と学術研究への想いなどを語っていただきました。

（聞き手は森 忠彦・公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構 常務理事）



国際高等研究所 副所長
赤松 玉女 氏

芸術は、当たり前を問い直す力

森 けいはんなは「関西文化学術研究都市」として「文化」を掲げていますが、これまで学術と比べ文化の側面は取り上げられることが少なかったと思います。先生は文化や芸術と学術との関わりについて、どのような印象をお持ちでしょうか。

赤松 芸術の世界で活動してきた私にとって、国際高等研究所（以下、高等研）は新鮮な出会いの連続です。さまざまな分野の研究者の方々と話をしていると、「芸術とは何か」「芸術は社会に何をもたらすのか」をあらためて考えさせられます。他分野の方々との対話によって、自身の専門の見え方が変わっていくことがとても刺激的でワクワクします。研究者の先生方にも、芸術ならではの捉え方が加わることで、これまでとは違う発想が生まれる。そんな面白さを感じていただけていたら嬉しいです。

森 「ポスト万博シティ」を掲げるけいはんな学研都市に求められている「新しい価値」を生み出すには、文化の力が必要だと感じています。何かヒントがいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

赤松 芸術は、ほんの小さな違和感やきっかけから始まり、「本当にこれでいいのか」と問いかけながら作品を生み出していきます。私は、正しい答えや結果を求めることよりも、問いを立て続けること自体が芸術の本質だと思っています。新しい価値を生み出そうと先を焦るよりも、まずは当たり前を疑ってみる。その積み重ねが結果として新しい価値につながっていくと思います。そうした視点が、これからのけいはんな学研都市の未来を豊かにしていくのではないのでしょうか。



赤松 玉女 あかまつ たまめ

画家、京都市立芸術大学名誉教授。京都市立芸術大学大学院修了後、イタリア・ボローニャを拠点に創作活動を展開。京都市立芸術大学教授、美術学部長、理事長兼学長を歴任した。創作と芸術教育の両面で活躍し、京都市文化功労者（2025年12月11日付）に選出されている。2025年10月、国際高等研究所副所長に就任。

出会いが新しい価値を生む

森 けいはんな学研都市における文化の役割については、どうお考えでしょうか。

赤松 文化には、人と人をつなぐ力があると思います。異なる分野や立場の人たちが偶然出会うことで、思いがけないアイデアや新しい発想が生まれることがあります。そうした出会いが自然に起こり、緩やかなつながりが広がっていく都市は魅力的です。けいはんな学研都市にも、そんな場や機会がもっとあってよいのではないかと思います。

森 そのお考えが、5月に高等研で開かれた「アート茶会」にも通じるのでしょうか。

赤松 そうですね。専門を深めると、どうしても同じ分野の人との交流が中心になります。高等研には日本文化の結晶といえる茶室※があります。この洗練された非日常の空間を、アートを介してさまざまな人が出会い対話する“実験の場”に変えて、活用できれば面白いと思っています。隣り合わせた人の言葉や考え方が、誰かにとって新しい発想の種になるかもしれません。

※高等研の茶室「雅松庵」は、裏千家前家元・千玄室大宗匠が命名・揮毫した茶室。

森 確かにアート茶会では、日常から解放された感じがしました。以前訪れたインド・ムンバイで感じた、混沌とした魅力にも少し通じる気がしました。

赤松 インドの混沌とお茶会の共通点ですか。面白いですね。茶室では日常から離れて感覚が開かれるのを感じます。作品を鑑賞する場としても特別ですし、長い年月を経た天井や壁の表情も含めて、五感が刺激されます。そんな普段とは違う環境だからこそ、新しい出会いや発想も生まれやすくなるのではないのでしょうか。

自主研究「文化芸術と科学の対話の構築」概要

従来、科学は「客観的な真理」を追い求め、芸術は「主観的な表現」を重んじるものとして、別々の文脈で語られる傾向がありました。しかし現代社会が直面する複雑な状況に対しては、単一の視点だけでは十分な解は得られません。そこで本自主研究では、文化芸術と科学との対話を通じて、互いの思考プロセスに学び合い、人間の営みの根底にある芸術の可能性を探り、更には社会の中での芸術や学問のあり方を考えます。



アート茶会の様子

撮影：田口葉子

「何を持ち帰るかはあなた次第」のまちへ

森 大阪・関西万博を契機に、けいはんな学研都市では第5期ステージプランがスタートし、ポスト万博シティとして新たな価値創造を目指しています。けいはんな学研都市が国内外の知名度を上げ、「選ばれる研究都市」であり続けるためには、どのような取り組みが必要とお考えでしょうか。

赤松 昨年のお阪・関西万博で面白く感じたのは、人の動きです。会場ではさまざまなことが繰り広げられ、来場者一人ひとりが自分なりの面白さを見つけていました。その様子は美術館にも似ています。美術館では、それぞれが好きな作品と出会い、何かを感じ取って帰ります。けいはんな学研都市も、皆が同じものを求めて集まる場所である必要はないと思います。ここでは多様な人や情報、活動に出会うことができる。そして「何を持ち帰るかはあなた次第」。そんな都市の魅力を育てていけばよいのではないのでしょうか。

森 それは、人材育成にも通じる考え方かもしれません。特に、現在急速に進展するAI時代に大切なことは何だと思われますか。

赤松 これからは、生まれた時からAIと一緒に過ごすことが当たり前の時代になります。AIは知識や情報を瞬時に答えてくれますが、だからこそ本質的に「あなたは誰なのか？」ということが問われると思います。AIが生み出してくれる時間を、自分自身を見つめ直すために使う。最初から答えを求めるのではなく、自ら問いを立てること、それが創造性につながり、新しい発想を生み出す力になるのではないのでしょうか。

芸術の世界でも、同時代の作品への評価はすぐには定まりません。でも、分からない、面白くないと言う前に、まずは体験してほしいと思います。現代アートは常に新しい表現を探る営みでもあります。そうした未知のものに出会った時、すぐに答えを出すのではなく、自分なりの視点で向き合うことで、新たな気づきが生まれることがあります。

森 若い人や地域の人たちへのメッセージをお願いします。

赤松 専門性を極めることはもちろん大切ですが、若い時期にはぜひ他領域にも関心を持つてほしいですね。私自身も、思いがけない出会いや異なる世界との関わりが大きな糧になっていたことに、後になって気づきました。若い人には、積極的に寄り道をしてほしいです。地域の皆さまには、多くの人に支えられながら発展してきたけいはんな学研都市を、これからも次世代につないでいくことをお願いしたいと思います。



パイロット・レジデンス概要

芸術家が一定期間滞在して制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」。その第一歩として、二人の芸術家、矢津吉隆氏と山田毅氏によるユニット「副産物産店」が滞在しています。彼らはアーティストの制作現場から生まれる「副産物」を収集・再構成し、「ものの価値や可能性」を考察してきました。本プログラムではその視点を芸術領域に留めず学問へと拡張し、研究活動における「副産物」を問い直す新たな試みを展開します。



研究合宿の様子



けいはんな未来フェス



けいはんなの今と未来に出会える「けいはんな未来フェス」!

「けいはんな未来フェス」は、けいはんな万博2025で育まれた実証・共創・社会実装の流れを継承し、学研都市全体の年間イベントとして発展させる取り組みです。単なるイベントではなく、地域の研究機関、企業、大学、自治体、住民が参加する「未来社会の実験場」として位置づけます。ぜひ、ビジネスで、ご家族で、お越しください。けいはんな学研都市でお待ちしています。

京都スマートシティエキスポ2026



最先端技術で社会課題を解決するソリューションが大集合。自治体や企業の新たな出会いがイノベーションを起こします。

けいはんなR&Dフェア2026



サイエンスシティの最新研究や科学に触れ学べるプログラム多数。未来を創る技術を家族や友達と体感できます。

人とアンドロイドの未来展

©FUTURE OF LIFE



大阪・関西万博で展示されたアンドロイドと出会う!人とテクノロジーが共生する未来社会を体感できるイベントも開催。

10月8日・9日 語る・知る・つながる

京都スマートシティエキスポ2026

📍けいはんなプラザ

国内外の企業・団体が集結する、日本最大級のスマートシティ関連イベントです。最新技術の展示や体験、講演を通じて、スマートシティを取り巻く最新の動向や未来のまちづくりを体感することができます。企業・研究機関・自治体との交流を通じて、新たなビジネスパートナーとの出会いや共創の機会を創出する2日間です。

主催:京都スマートシティエキスポ運営協議会



ATRオープンハウス2026

📍ATR

AI、脳情報科学、ロボティクス、無線・通信など、ATRが世界に先駆けて挑む最先端研究を紹介。研究者による講演やポスター展示を通じて、未来社会を支える技術が見えます。

主催:株式会社 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)

オープンラボ・テックツアー

📍けいはんな学研都市域内

けいはんな学研都市に立地している普段入れない研究・実証の現場をめぐるテックツアー。訪問先やコースは近日公開予定。

主催:関西文化学術研究都市推進機構・京都府



イベントMap

会場A けいはんなプラザ:京都スマートシティエキスポ・けいはんなR&Dフェア
会場B ATR:ATRオープンハウス2026
会場C KICK:人とアンドロイドの未来展 ※雨天時のアバターチャレンジ会場はこちら
会場D けいはんな記念公園前の歩道:アバターチャレンジ

11月7日 体験する・学ぶ・まちに出る

けいはんなR&Dフェア

📍けいはんなプラザ

見どころ満載!!けいはんなR&Dフェア2026最先端科学技術の展示・体験デモや、対話型サイエンスショー・実験ワークショップなど、多彩なコンテンツが集結。けいはんなの研究機関や企業・大学が集まり、未来につながる科学の魅力を体感できる一日です。

主催:けいはんなR&Dフェア実行委員会

けいはんな

サイエンスフェスティバル

📍けいはんなプラザ

午後:奈良県立奈良高等学校SSH事業の連携校やけいはんな地区の児童、生徒、教員、市民が、科学に親しむ機会とするとともに、学び合う場とする。午前には、若手理工系人材による出前授業が開催されます。

主催:【午後のみ】奈良高校
共催:精華町

けいはんなアバターチャレンジ

📍けいはんな記念公園前の歩道

研究者には「研究室では見えない問題を発見する場」を、企業には「遠隔就労・遠隔介護・遠隔接客の実証フィールド」を、投資家には「2035年のアバター社会を先取りする実証都市」を、住民には「未来の町内会」を提供することを目指します。

主催:特定非営利活動法人けいはんなアバターチャレンジ
共催:精華町

人とアンドロイドの未来展

📍KICK

大阪・関西万博シグネチャーパビリオン「いのちの未来」からけいはんなにやってきた、アンドロイドの展示イベント。アンドロイドとの出会いを通じて、人とテクノロジーが共生する未来社会を体感しよう!

主催:いのちの未来研究所・京都府



©FUTURE OF LIFE

日時	イベント	会場	主催
10月3日(土)・24日(土)	けいはんな赤ちゃん学講座	けいはんなプラザ	けいはんな学研都市活性化促進協議会
10月8日(木)～9日(金)	京都スマートシティエキスポ2026	けいはんなプラザ	京都スマートシティエキスポ運営協議会
10月8日(木)～9日(金)	オープンラボ・テックツアー	未定	関西化学術研究都市推進機構
10月8日(木)～9日(金)	ATRオープンハウス2026	ATR	国際電気通信基礎技術研究所(ATR)
10月10日(土)	いい明日・フォレスト・サロン -対話と体験がひらく知の森-	国際高等研究所	国際高等研究所
10月25日(日)	量子科学技術研究開発機構(QST) 施設公開	関西光量子科学研究所	量子科学技術研究開発機構(QST)
10月25日(日)	きたよ、万博。inひらかた	和幸カントリー倶楽部他	枚方市総合政策部政策推進課
10月27日(火)～28日(水)	フードテックエキスポ2026	みやこめっせ	京都フードテック協議会
10月31日(土)	ナイスポ! NAIST EXPO2026	奈良先端科学技術大学院大学	奈良先端科学技術大学院大学
10月未定	いい明日・フォレスト・サロン -対話と体験がひらく知の森-	未定	国際高等研究所
11月1日(日)	かもまつり・(仮称) 恭仁京天平祭	恭仁宮跡	かもまつり実行委員会・ 史跡「恭仁宮跡」活用事業実行委員会
11月3日(火/祝)～ 29日(日)予定	紅葉ライトアップ	けいはんな記念公園 水景園	けいはんな記念公園
11月7日(土)	けいはんなR&Dフェア2026	けいはんなプラザ	けいはんなR&Dフェア2026実行委員会
11月7日(土)	アバターチャレンジ2026	精華大通り他	特定非営利活動法人 けいはんなアバターチャレンジ
11月7日(土)	第5回 ロボットアームで お祭りチャレンジ!	けいはんな記念公園	ミラトリエ 共催:SEIKAクリエイターズ インキュベーション拠点コンソーシアム
11月7日(土)	人とアンドロイドの未来展	KICK	いのちの未来研究所・京都府
11月7日(土)	けいはんなサイエンスフェスティバル2026 (ポスターセッション)	けいはんなプラザ	奈良高校 共催:精華町
11月7日(土)	わたしの未来発見! 理工チャレンジ教室 in 精華町	けいはんなプラザ	内閣府 共催:精華町
11月7日(土)	木津川市市民まつり2026	梅美台公園	木津川市夏祭り実行委員会
11月14日(土)・21日(土)・ 28日(土) (予備12月5日(土))	公開講座2026	奈良先端科学技術大学院大学 (21日/28日/予備12月5日) たけまるホール (14日)	奈良先端科学技術大学院大学 生駒市
11月15日(日)	せいか祭り	けいはんな記念公園	せいか祭り実行委員会
11月15日(日)	SEIKAサブカルフェスタ2026	けいはんなプラザ	SEIKAサブカルフェスタ実行委員会
11月15日(日)	第6回 ロボットアームで お祭りチャレンジ!	けいはんな記念公園	ミラトリエ 共催:SEIKAクリエイターズ インキュベーション拠点コンソーシアム
11月28日(土)	けいはんな赤ちゃん学講座	けいはんなプラザ	けいはんな学研都市活性化促進協議会
11月未定	アート茶会	未定	国際高等研究所
12月6日(日)	けいはんなフィルハーモニー 管弦楽団演奏会	けいはんなプラザ	けいはんなフィルハーモニー管弦楽団
12月13日(日)	第8回けいはんなこどもCLASSIC塾	けいはんなプラザ	高の原音楽芸術協会
12月19日(土)	けいはんな歴史講座	けいはんなプラザ	けいはんな学研都市活性化促進協議会
12月27日(日)	一休(IKKYU)フィルハーモニー 定期公演 第5回「全」市民第九演奏会	けいはんなプラザ	NPO法人京田辺音楽家協会

11月7日(土) 13:00~17:00(予定) **アバターチャレンジ2026**

テーマ「日本のお正月」

海外出張中の父親がアバターとなって日本の家族と新年を迎える未来を表現。

2026年は、頭や腕を動かす競技種目を設定し、遠隔就労、介護、見守り、観光など、生活に密着した領域への展開を目指します。本大会では、身近な生活文化を舞台に、ロボットに手を装着して屋内外で活動する姿を見せ、人が安全・安心に関われる未来社会の姿を実証します。

 **けいはんな記念公園前の歩道・けいはんなオープンイノベーションセンター (KICK)**



※雨天の場合は、けいはんなオープンイノベーションセンター内ロボットセンターが会場となります。

※ルートや会場、競技種目は変更となる可能性があります。

地図: Google マップ (© Google)

アバターチャレンジの軌跡「公道実証から社会実装へ」

アバターチャレンジは、ヒトとロボットが共生する社会の実現を目指す、社会実装型の取組です。その実証の場として、実社会のさまざまな局面を想定し、リモート制御ロボット「アバター」を用いた競技を行っています。

学生や企業を通じて技術を磨きその進化の過程を地域の多くの皆さんに知っていただくことで、先端技術への理解を広げ、社会実装を前に進めることを目指しています。これまで、技術開発に加え、公道走行時の安全を確保する運用体制や、警察の協議など、技術を社会に実装する工夫を重ねてきました。アバターチャレンジはこうした試行錯誤を住民に開きながら、未来社会の姿を技術者と地域がともに考え、共創していく場として機能しています。

ポスト万博の10年間を通じて

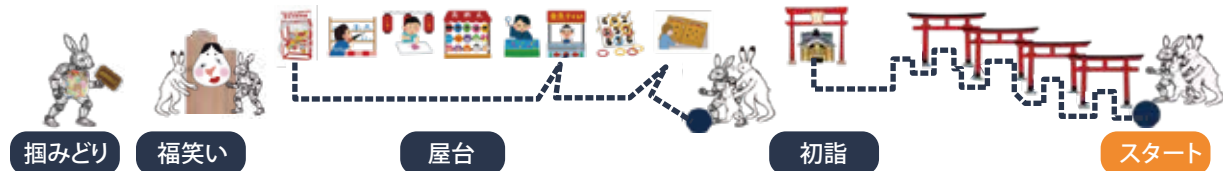
- アバター（遠隔操作型）ロボットの技術進化を可視化する継続イベントを展開し、一般社会への普及・啓発を図ります。
- 社会実装を進める過程で生じる制度面・技術面の課題を解決し、ロボットと人が共生する社会の実現に寄与します。

当日、皆さまのご来場を心よりお待ちしております。 <https://www.avatarchallenge.org/>



みどころ ①

けいはんな記念公園周辺でパレード および ロボットアーム(手)を使った作業の競技



STAGE 1 『初詣』競技 (タイムを競う)

1. お賽銭
2. 鈴を鳴らす
3. 二礼二拍手一礼

STAGE 2 『屋台』競技 (時間内獲得数)

子供のために、屋台で商品を得る
任意の競技(数種類)を行い総合点を競う。
競技の難易度によって点数が変わる。

STAGE 3 『福笑い』競技 (時間内完成度)

人間とロボットの共同作業をテーマにした競技。
目隠し状態のロボットで福笑いを実施。

STAGE 4 『買い物』競技 (時間内獲得数)

両手を用いたアーム作業をテーマにした競技。
日常生活での利用を想定した買い物を競技にする。

みどころ ②

ATRいのちの未来研究所とのコラボレーション

大阪・関西万博が示した「いのちがアンドロイドに宿る50年後の世界」と、いのちの未来研究所が扱う「50年後の未来」をつなぐ物語的な世界観が形成されました。アバターチャレンジは、この連続した未来像の中で、現在から50年先へと続く進化の軌跡を描く大会として企画されています。



大阪・関西万博シグネチャーパビリオン
「いのちの未来」のアンドロイドを展示し、
パフォーマンスを披露

いのちの未来研究所の描く世界

50年先の「いのちの未来」として、いのちがアンドロイドに宿り、存在を受け継がれていく世界を描いています。

アバターチャレンジが描く世界

ロボットが社会に溶け込み、アバターが人と人を結ぶ10年後の近未来。アバターロボットが距離や制約を超えて人々をつなぐ世界観を、競技の背景として描いています。

協力：ムーンショット型研究開発事業目標1 研究開発プロジェクト「誰もが自在に活躍できるアバター共生社会の実現」

2023年

プレ大会(私有地)



遠隔操作(走行・対話・動作)の
基本性能を検証

2025年

大会(公道)



公道で複数アバターを同時に動かし、
走行・対話・腕(手)動作の性能を検証



お買い物競争

2026年

大会(公道)



腕を装着したアバターが屋外で
安心・安全に活動する姿を検証

ふるさとめぐり

四條畷市編

けいはんな学研都市の8市町をめぐり、魅力的なふるさと納税返礼品を紹介するよ！

田原の里 ハチミツ

田原の里で養蜂をされているという、東山さんと片下さんにお話を伺ったよ。自然の中にいくつもの養蜂箱を設置してハチミツを採取されているお二人。片下さんによると「自然豊かな田原の里は蜜源が多く、桜やツツジ、レンゲ、菜の花、ニセアカシアなど季節によっていろいろな花が咲きます。わたしたちが養蜂しているニホンミツバチはその何種類もの花の蜜を集めてくるので、とてもコクが深いハチミツになるんです」とのこと。

ハチミツ

ニホンミツバチが1年かけてさまざまな花の蜜を集めた、濃厚で奥深い味わいのハチミツ。市場でも限られた場所でのしか手に入らない逸品です。



ニホンミツバチは蜂の中でもとても小さく、一ヶ月の寿命で一生かけて採取するハチミツは小さじ一杯ほど。そうして集められたハチミツは、濃厚でありながらも爽やかで深みのある甘さが特徴。ハチさんが一生懸命集めた蜜だと思えば、よりじっくりと味わいたくなるね。「わたしはテレビ番組で紹介されていたのを見て、養蜂に興味を持ったんです。全て独学で、初めて蜜が採取できたときは『こんなに美味しいハチミツがあるのか!』と感動しましたよ」と、東山さん。お二人のお話を聞いてハチミツを味わうと、田原の豊かな自然が口に広がっていくような気がしたよ。

返礼品、ほかにもいろいろ！

空とぶからあげ 塩にんにく味
生タイプ（ハジメフーズ）



からあげグランプリ・塩ダレ部門で金賞を受賞した実力派の返礼品です。片栗粉をまぶして油でカラッと揚げただけで、外はサクッ、中はジューシーな本格からあげをご家庭で手軽に楽しめます。

絵本作家 谷口智則
「飯盛山花見登山」原画
(gallery&cafe Zoologique)



代表作「100にんのサンタクロース」で知られる絵本作家・谷口智則氏が「飯盛山花見登山」をテーマに描き下ろした世界に1点だけの貴重な原画です。

どら焼き なわて社
こだわりの手作り和菓子
(御菓子司 大徳屋)



店内で一つひとつ丁寧に作るどら焼き。ふんわりとした生地と上品な甘さのあんが調和した、リピート率No.1の人気和菓子です。

ベーカリーマーケット PANISTA パニスタ

田原台の住宅地にあるベーカリーマーケット『パニスタ』。店内にはコッペパンサンドやメロンパン、パニスタ特製カンパーニュ「たわらーにゅ」などいろいろな種類のパンが並び、どれも美味しそうで目移りしちゃう!「実は最初はネット販売をメインに考えていたのですが、ずっとパン屋さんとして営業されていたこの建物を引き継いで準備をしていると、近所の人たちが『またパン屋さんができる!』とすごく期待してくださって。街の人の注目や熱意もあり、店頭販売もできるようになっていったんです」と、店主の和田さん。



パンのこだわりは、素材に一切妥協をしないこと。種子島のきび糖、沖縄のあらじお、そして四條畷産の全粒粉を使い、「とにかくシンプルなパンを、高品質に」という心がけで製造されているよ。「四條畷で小麦粉が作られていることを知らないという地元の人が多いんです。このパンを通して街のみんなに、地元産の素材を知ってもらうきっかけになればいいな。地元の人たちをパンを通して繋ぐ架け橋になることが、ぼくがパン屋さんをやる意味でもあるのかなって思います」と和田さん。メイドイン四條畷のパンは美味しいだけでなく、地元の人を繋いでいるんだね!

ふるさと納税おとこ

たわらーにゅ

四條畷市下田原産の全粒粉を30%使用したカンパーニュセット。しいたけ粉末のうま味と香ばしさ、サワー種の豊かな風味が楽しめる、もちり食感のパンです。



INFORMATION

企業版ふるさと納税で四條畷市を応援できます!

大阪市内へのアクセス抜群な利便性と、豊かな自然環境が共存する四條畷市。本市では、「若い世代に選ばれ、高齢者も安心して暮らせるまち」の実現に向け、持続可能なまちづくりを進めています。企業の皆様、地域貢献やSDGs・CSRの新たな取組として、企業版ふるさと納税をご活用ください。



取組概要

ご支援いただいた寄附金は、以下の分野の取組で活用させていただきます。

ひとづくり (学びの支援事業)

中学生の習い事支援、ICTを活用した教育の充実など

まちづくり (まちづくり事業、産業と地域の活性化事業)

JR忍ヶ丘駅前の活性化、未来技術の実装など

しくみづくり (子育て支援事業、健康寿命の延伸事業、DXの推進事業)

保育所等の待機児童解消、健康意識の向上と生活習慣病予防、オンラインサービスやキャッシュレス等の導入における窓口改革など

企業版ふるさと納税

詳しくはこちら

<https://www.city.shijonawate.lg.jp/page/3-28809.html>



ふるさと納税

申し込みはこちら

<https://www.city.shijonawate.lg.jp/site/furusato/>



イラスト・記事制作 おおえ さき

イラストレーター、マンガ家、ラジオDJ。京都市出身。

著書『ショート・ショート・キョート』発売中。

FMKYOTO『FLOWER HUMMING』

毎週日曜20時からOA中。

SNSにて作品更新中! X / Instagram @ohyeah_saki

人を支えるロボットで未来をつくる —けいはんなから描くロボット共生都市の未来

大阪電気通信大学 工学部電子機械工学科(ロボティクス)



大阪電気通信大学 工学部電子機械工学科(ロボティクス)の鄭聖熹(チョン ソンヒ)教授は、人に寄り添い、人を安全にサポートするロボットの研究開発を進めています。教育と実践を両立するため大学発ベンチャーも設立し、研究成果の社会実装にも挑戦されています。けいはんな万博2025では、アバターチャレンジに参加。閉会セレモニーで披露された、「指揮ロボット」の開発でも注目を集めました。ロボットと人が共生する未来社会について、お話を伺いました。

人を安全に支えるロボットの 実現を目指して

研究のターゲットは「人を安全にサポートできるロボットの開発」です。ソフトウェア面だけでなくハードウェアを重視して、物理的にも安全に人間をサポートできるロボット、中でも高齢化社会を支えるリハビリテーションロボットや、社会インフラの維持管理に役立つロボットの研究開発に学生とともに取り組んでいます。

韓国から日本へ —ロボット研究者への道

私は韓国で生まれ、機械を設計してみたくて大学の機械工学科に進学しましたが、1997年に韓国が深刻な経済危機に見舞われたことを機に休学し、日本を訪れました。その際、トヨタの展示施設でハイブリッド車「プリウス」に興味を引かれ、日本でメカトロニクスを学びたいと思いました。大学卒業後、国費留学生として2000年に東北大学の工学部に入りました。当時、大学ではサービスロボットの開発プロジェクトが始動しており、ロボットの手が人にぶつかった場合、どうしたらけがをさせずに済むか、衝撃力の低減が研究テーマとなりました。

「まず作ってみる」失敗から 学ぶものづくり教育

学生たちには、「まず作ってみること」が大切だと伝えています。とりあえず形にして、体験し、そこから考えるように言っています。失敗の経験を積まない限り、良い物はいくらもつくれません。

本学の電子機械工学科は60年以上の歴史があり、ハードウェア中心にも作りに強いのが特長です。今後AIとロボット工学の共同研究や開発が盛んになると考えています。

フィジカルアバターが広げる 新たな可能性

実際に物理的な空間で作業するアバターに興味を引かれたことと、学生

にとっても、もの作りの良い機会だと考え、昨年のけいはんなアバターチャレンジに参加しました。今年も参加したいと考えています。フィジカルAIの登場もあり、将来はロボットが状況判断し、操作者へフィードバックするとともに現場の状況を助言することもできる「フィジカルアバター」の実現を目指しています。

2か月で完成させた 「指揮ロボット」

昨年、けいはんな万博2025の閉会セレモニーについて、ATRの浅見徹先生と打ち合わせをした時、遠隔操作の指揮ロボットが登場したら面白いと盛り上がり、急遽私の研究室でつくることになりました。本番まで2ヶ月しか



大阪電気通信大学 工学部電子機械工学科 鄭聖熹教授

い中で、大学院生を中心に開発し、ほとんどぶっつけ本番で、指揮者の動きを再現するアバターロボットが舞台に立ちました。当日、私は別の仕事で現場にいけなかったのですが、後で送られてきた映像を確認してほっとしました。学生たちも良い経験になったと思います。

研究成果を社会へ —大学発ベンチャーへの挑戦

鉄道事業者との共同研究では、高さ10mを超える鉄柱の塗装作業を支援するアバターロボットの開発を行いました。作業者は遠隔地からロボットを操作し、危険な現場や負担の大きい作業を安全に行うことができます。また、介護やリハビリテーションを支援するロボットも長年研究してきました。どちらも社会的ニーズが高いと考え、起業して商品化を目指すことにしました。

大学発ベンチャーにしたのは、学生のアルバイト先にもなると考えたからです。せっかく工学系の勉強をしているのだから、実践経験が積める場にしたいと考えました。同時に、私自身が企業経営を経験することで、学生の進路指導にも役立っています。

10年後の人とロボットは、 そして若い世代へ

人間と同等の作業ができるロボットがますます普及するでしょう。大切な



アバターチャレンジに参加したアバターロボット(左)と指揮ロボット(右)。

は、国の政策や社会的な合意により、いかに人とロボットが仲良く暮らせる社会を作っていけるかだと思います。私がロボット研究で心がけているのは、「大事なものは人」だということです。人が安全に安心して暮らせる社会を実現するため、それをサポートできるもの作りをしたいと思っています。

そして、けいはんな学研都市は、ロボットと人が共生するモデル都市として、一歩先の未来を示す都市になってほしいと思います。そのための実証が数多く行われ、未来の技術開発を先導する都市になれば、若い人たちが集まり、周辺都市のロールモデルになると思います。

鄭教授が設立した大学発ベンチャー「S-coRT技研」は、移動ロボット教材「EduCar-spicon」を開発。組み立てや制御プログラミングからIoT、AIまで段階的に学べる教材として、奈良県立王寺工業高校に30台が導入されました。

プレスリリース：<https://www.osakac.ac.jp/news/2026/3934>



大阪電気通信大学 工学部電子機械工学科(ロボティクス)
<https://www.osakac.ac.jp/faculty/engineering/eme/>



微生物の力で未来のものづくりを変える ～RITEバイオものづくりセンターの挑戦～

公益財団法人 地球環境産業技術研究機構(RITE)



RITEバイオものづくりセンター。
次世代の環境にやさしいものづくりを支える
研究拠点です。

POINT

木津川市にあるRITEバイオものづくりセンターは、微生物の力を活用して環境にやさしい製品づくりを目指す研究拠点です。微生物の開発から生産技術の実証までを一貫して行える強みを生かし、企業や大学と連携しながら、次世代のものづくりと持続可能な社会の実現に挑戦しています。

地球環境の課題に応える 新しい研究拠点

近年、地球温暖化や資源の有効利用が世界的な課題となっています。私たちの暮らしを支えるプラスチックや化学製品の多くは石油を原料としていますが、限りある資源への依存を減らし、環境への負荷を小さくする新しいものづくりが求められています。

こうした背景のもと、RITEは2026年4月、次世代の産業を支える研究拠点としてRITEバイオものづくりセンターを開設しました。このセンターは、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の「バイオものづくり革命推進事業」の中核拠点の一つとして整備された研究開発施設です。環境課題の解決と経済成長の両立を目指し、微生物の力を活用した持続可能なものづくりの実現に取り組んでいます。



微生物の培養装置。
微生物の働きを活用して、
環境にやさしい製品づくり
につながる研究を進めて
います。

微生物の力を活用する 「バイオものづくり」

バイオものづくりとは、微生物などの働きを利用して、日用品や化学製品のもととなる物質をつくる技術です。パンやヨーグルトなどの発酵食品にも微生物が使われています。バイオものづくりでは、そうした微生物の力をさらに発展させ、さまざまな製品づくりに活かそうとしています。

RITEバイオものづくりセンターの大きな特徴は、目的の物質をつくる微生物の開発から、生産方法の開発、さらに実際の製造を見据えた実証までを一つの拠点で進められることです。RITEが長年培ってきた微生物研究の知見や、生産性の高い微生物を創り出す技術に加え、AIなどのデジタル技術も活用しながら、効率的な研究開発を進めています。さらに、企業や大学の研究者とも連携しながら、研究成果を社会で実際に使われる技術へとつなげています。

持続可能な社会の 実現に向けて

今後、バイオものづくりは、石油に依存しないものづくりを支える技術として、ますます重要になると期待されています。RITEバイオものづくりセンターでは、使われていない木材や農業残さなどの未利用資源の活用や新しい生産技術の開発を進めるとともに、企業との連携を通じて実用化に向けた支援にも取り組んでいます。

私たちは、微生物が持つ可能性を最大限に引き出し、環境にやさしいものづくりを通じて持続可能な社会の実現に貢献していきます。また、このような研究活動が、地域の皆さまや次世代を担う子どもたちに、科学や環境への関心を深めてもらうきっかけになることを願っています。

公益財団法人
地球環境産業技術研究機構
(RITE)バイオ研究グループ
主任研究員 久保田 健
<https://www.rite.or.jp/bio/>



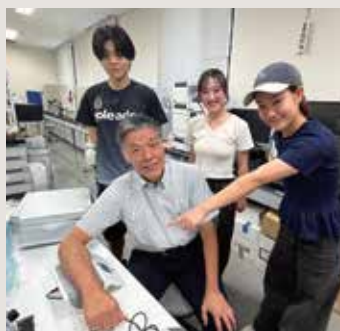
微生物の力を活用したものづくりは、資源を有効に使いながら環境負荷を減らすことが期待されています。



同志社ジュニア・クリエイティブ科学アカデミー 「好奇心を研究へ!エクスプローラー・レベル始動」

2026.6.5

同志社ジュニア・クリエイティブ科学アカデミーでは、今年度から第2段階となる「エクスプローラー・レベル」がスタートしました。受講生は大学教員や大学院生メンターの指導を受けながら、自分の興味や疑問を研究へと発展させています。食品に含まれる成分に着目したアンチエイジングの研究をはじめ、LEDの発光実験やペルチェ素子、太陽電池の製作を通した半導体の研究など、テーマはさまざま。また、研究に必要なデータや知見を得るため、京都の織物会社で手織り機を体験した受講生もいます。一人ひとりの「もっと知りたい」が、本格的な研究へとつながっています。今年11月頃には、小中学生を対象とした「プレ・プログラム」を実施予定です。詳細は9月下旬頃、ホームページでお知らせします。ぜひご覧ください。



同志社ジュニア・クリエイティブ科学
アカデミー
[https://www.doshisha.ed.jp/
jrc_academy/](https://www.doshisha.ed.jp/jrc_academy/)



「次世代型遺跡博物館」の実現に向け連携研究協定締結 奈良文化財研究所と大日本印刷

2026.7.10

「文化財」は、昔の人々が生きた痕跡だったり、彼らのケツサクだったり、そういうものです。その向こうにスッとかつて生きた人々の姿が見えるはずですが、ただ、せっかく発掘した遺跡は保護のために埋め戻して見ることができず、発見されるものが焼き物の破片では、なかなかわかりにくい。「文化財」は避けられがちです。

では、どう伝えるか。デジタル技術があるじゃないか。でも、奈良文化財研究所にはデジタルで伝えきる技術がないじゃないか。ならばパートナーと協業しよう。DNPがいるじゃないか。奈良文化財研究所には調査研究の蓄積があります。DNPには、デジタルで伝える技術と、それを社会で活用するノウハウがあります。協力して世界遺産・平城宮跡を舞台に、歩いて、見て、感じて、考える、まったく新しい「遺跡博物館」を作ろう。さらに、日本中の、いや世界の遺跡・文化財に広めよう。

これが私たちの協定です。さあ、「文化財沼」へ、ようこそ。



プレスリリースはこちら
[https://www.nabunken.go.jp/
news/2026/07/20260710press.html](https://www.nabunken.go.jp/news/2026/07/20260710press.html)



ドルトンX学園とけいはんな学研都市が連携協定を締結

2026.7.17

学校法人河合塾学園が設置を予定するドルトンX学園高等学校とけいはんな学研都市は、「けいはんな学研都市における地域滞在型学習を通じた地域活性化の取り組みに関する協定」を締結しました。ドルトンX学園は、2027年4月開校予定の全寮制高校で、「旅するボーディングスクール*」をコンセプトに、生徒が国内外の地域に滞在しながら学ぶ新しい教育モデルを構想しています。

けいはんな学研都市には大学や研究機関、先端企業が集積しており、本協定では、学習拠点の運営や地域資源を活用した課題解決型探究学習の実施、地域住民や企業との交流機会の創出、生徒の起業支援、都市の魅力発信、人材育成など幅広い分野で連携を進めることとしています。生徒たちは地域に滞在しながら、研究者や企業、住民との交流を通じて実践的な探究活動に取り組む予定であり、次世代人材の育成と地域活性化を同時に実現する新たな挑戦として期待されています。

*ボーディングスクール：寄宿学校



左から、荒木康寛(株)けいはんな代表取締役社長、古屋輝周(株)KJホールディングス執行役員、山口悟郎(公財)関西文化学術研究都市推進機構理事長、西脇隆俊京都府知事



本年3月にAI・ロボティクスをテーマとしたツアーを実施し、中高生8名が参加しました。研究機関・企業・スタートアップ企業など、異なる立場や多様な分野の研究に触れながら、研究の現場とその考え方を多角的に学ぶことができました。

関西文化学術研究都市建設推進に向けた要望活動

2026.7.24

関西文化学術研究都市建設推進協議会（会長：松本正義関西経済連合会会長）では、政府の予算編成において年2回、イノベーション推進や都市基盤の整備を求め、要望活動を行っています。

今夏は、各省庁から財務省への概算要求提出のタイミングに合わせて、関係省庁（内閣府、文部科学省、経済産業省、国土交通省）を訪問しました。

本年度から始動した「けいはんな学研都市第5期ステージプラン～ポスト万博シティけいはんな～」の推進に向けて、レベル4自動運転技術の実装に向けた取組への支援、関西文化学術研究都市建設促進法に基づいて整備される文化学術研究施設に係る税制措置の拡充及び延長、「ポスト万博シティけいはんな」の推進への支援、そして都市インフラ早期整備への支援充実などを求め、要望書を提出し意見交換を行いました。

今秋、政府予算案の閣議決定に向けた財務省原案策定のタイミングにあわせ、再度、関係省庁への要望活動を実施する予定です。



小林茂樹 文部科学副大臣へ要望書を手交



上田英俊 国土交通大臣政務官へ要望書を手交



若山慎司 内閣府大臣政務官との意見交換

万博の感動を未来へ

万博レガシーイベントでけいはんな学研都市を発信

2026.8.21-23

万博レガシーイベント「Resona EXPO Re:Future」(大阪南港ATCホール)では、3日間限定で、けいはんな万博2025で披露したロボット・アバターやウェルビーイング展示が復活しました。期間中は多くの来場者でにぎわい、スタンプラリーには長蛇の列ができるなど予想を上回る人出で、会場は終始熱気に包まれました。特に、アバターロボットの操縦体験コーナーは子どもたちにも大人気で、けいはんな学研都市が取り組む先端技術のPRにもつながりました。

今回の出展は、万博をきっかけに生まれたけいはんな学研都市の関係機関におけるつながりや交流を未来へと受け継ぐとともに、会場の大阪湾岸エリアをはじめ、関西圏の各拠点とけいはんな学研都市を結ぶ東西軸を中心に、広域的な交流連携を深め、万博の成果を社会に実装する「ポスト万博シティ」としての役割を発信する貴重な機会となりました。



NICTの音声マルチスポンジ再生技術を体験する吉村大阪府知事

大学・研究機関が連携し、次世代の人材育成へ 「大学・研究機関」第7回共創会議を開催

2026.8.25

けいはんな学研都市「大学・研究機関」第7回共創会議(座長:西尾章治郎 国際高等研究所所長)を大阪公立大学森之宮キャンパスで開催しました。本会議では、4月にスタートした「けいはんな学研都市第5期ステージプラン〜ポスト万博シティけいはんな〜」を踏まえ、大学・研究機関の連携による今後の取組について意見交換を行いました。

今回、13大学・8研究機関が連携して取り組む初の事業計画として、「けいはんな Student Summit 2026」などの人材育成事業を決定しました。Student Summitでは、13大学の学生・大学院生が大学や専門分野の枠を越えて交流・対話し、けいはんな学研都市の未来について考える実践型プログラムを展開予定です。

大阪・関西万博のレガシーを次世代へ継承し、学研都市に集積する「知」を新たな価値創出につなげるため、大学・研究機関の連携をさらに深め、「ポスト万博シティけいはんな」の実現を目指していきます。



会場となった大阪公立大学森之宮キャンパス(8月25日撮影)

けいはんな学研都市第5期ステージプラン推進会議 第1回総会 開催報告 〜ポスト万博シティけいはんな〜

2026.9.2

けいはんなプラザで開催された標記の総会には、第5期ステージプランの推進に関わる府県市町をはじめ、国の機関、大学、立地機関、経済団体、学識者などあわせて約120人の参加(オンライン出席含む)がありました。

総会では、第5期ステージプラン推進会議設置要綱について審議・承認され、会長には関西文化学術研究都市推進機構の山口理事長が就任しました。その後、ステージプランの具体的な推進方策を検討する「推進コア会議」の設置や、今後の取組方針について報告がありました。意見交換では、国の政策と連動した取組への期待が示されたほか、地域の中小企業や住民の声を反映するフィードバック体制構築や目標達成に向けたロードマップの必要性、イノベーションと文化活動のバランスへの配慮の重要性などの意見も出され、今後のステージプラン推進の方向性を共有しました。



けいはんな 人物図鑑

TCC たわらコネクタート を支えるひとたち



地域をつなぐ新たな移動のかたち—たわらコネクタートの歩みと挑戦

四條畷市東部に位置する田原地域は、豊かな自然環境に恵まれる一方で、急峻な地形や高齢化の進展により、日常生活における移動の確保が大きな課題となってきました。「誰かの移動を助けたい」「地域をより良くしたい」そんな切実な思いから、住民の皆様が中心となり、低速電気自動車を活用した移動支援のあり方を模索する取組が始まりました。

住民の思いから始まった挑戦

このプロジェクトの特筆すべき点は、プロセスすべてが地域住民の主体性に基づいていることです。運用方法の検討はもちろん、「たわらコネクタート(TCC)」という親しみやすい愛称も、住民の方々が知恵を絞り、話し合いを重ねる中で名付けられました。



地域を支えるボランティアの力

毎週水曜日および第3土曜日の定期運行は、地域住民の生活リズムに定着しつつあります。「水曜日は買い物へ」「土曜日は交流拠点へ」といったルーティンが生まれることで、これまで外出を控えていた方々の意識が変わり、外出頻度の向上という明確な「行動変容」が促されています。また、車内での自然な対話は地域コミュニティの再接続を後押しし、社会的な孤立を防ぐ役割も果たしています。



未来につなぐ地域の挑戦

2024年5月からは、レベル4自動運転の社会実装に向けた実証実験を重ねています。最先端技術が生活の道具として機能するこのモデルは、産学官連携による先進的な地域交通モデルとして注目されており、現在は「外出機会の創出」「地域交流の活性化」「QOLの向上」を同時に達成する地域インフラとしての役割を確立しつつあります。今後は、蓄積された運行データの活用や技術の高度化を通じ、より利便性が高く、持続可能な交通システムを構築していきます。住民の声から生まれ、住民により名付けられた愛称とともに走り続ける「たわらコネクタート」。この挑戦の物語は、最先端技術とコミュニティが融合する、地域交通の新たな可能性を切り拓く先駆的な事例として、これからも進化を続けてまいります。

本事業では、安心・安全な移動サービスを提供するため、自動運転とデマンド運行を組み合わせ実施しています。グリーンホール田原と田原台センターを繋ぐ定時定路線ルートについては、高精度3次元地図を用いた自動運転(レベル2)により運行を行う一方、各地区の公園や集会所に設けた「のりば」を活用するデマンド運行も実施して地域の皆様の移動を柔軟にサポートしています。

*デマンド運行:乗車場所と降車場所を事前に予約の上、ニーズに合わせて行う運行

田原地区の都市建設とアイデンティティ

田原地区は、自然環境が豊かという地域特性を生かし「水と緑と石のあるまち」をコンセプトとしてけいはんな学研都市のクラスターの一つとして開発されました。生駒山地を含む地形であり、造成工事では、大小の花崗岩が出現し、岩盤も露出しているところも多くあったため、作業は困難を極めました。さまざまな技術や最新技術なども採用して整備を進めました。

造成工事で多数産出した花崗岩（田原石…従来、庭石、石垣等にものみ使用されていた。）を彫刻という芸術作品の素材として利用して、平成2年のまちびらき時に彫刻シンポジウムが開催されました。これは約2か月間、国内外から参加した著名な芸術家8人が田原地区に滞在し、産出した自然石を用いて、地域の社会性、歴史的環境や自然を把握し、モニュメントやストリートファニチャーなど、立体造形物の制作に情熱を込めて取り組みました。

この石を田原地区のアイデンティティを与えるシンボルマテリアルとして、公園緑地や歩行者専用道路などの公共施設へ利用することで、まちに文化と創造性、アート感覚を与える新たな試みがなされました。なお、これらの石の造形物群により、平成4年度「都市景観大賞（景観形成部門（小空間レベル）」を受賞しました。

関西文化学術研究都市推進機構
前常務理事
河合 智明



開発中の田原地区



着任ご挨拶

2026年6月18日付けで、関西文化学術研究都市推進機構の常務理事に就任しました森忠彦（もりただひこ）と申します。けいはんな学研都市に関わる皆様には、日頃より大変お世話になっております。厚く御礼申し上げます。

本年、当推進機構は設立から40年の節目を迎えました。3月に策定しました「第5期ステージプラン～ポスト万博シティけいはんな～」がいよいよスタートいたします。

けいはんな学研都市で生まれた研究成果を実証する段階から、実際の社会へ実装する段階へと、正に本学研都市の真価が問われるフェーズに入りました。このような重要な節目に、河合前常務理事より重責を引き継ぐことになり、身が引き締まる思いです。

私は社会人になってから、約11年間民間企業でインフラの研究開発に携わり、さらに約25年間、独立行政法人都市再生機構（通称：UR都市機構）でまちづくりに携わってきました。直近3年間は、東南アジアを中心とした海外のまちづくりに取り組みました。これらの経験から、まちづくりを推進する自分自身が仕事を楽しむことができなければ、決して魅力あるまちづくりは実現できないということを学びました。

これまでの専門性やまちづくりの経験を背景に、日本や世界が直面する社会課題の解決を目指した、研究成果の実装を実現する取り組みを進めるとともに、けいはんな学研都市全体の知名度向上にも取り組んでまいりたいと考えておりますので、引き続き皆様のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構
常務理事・事務局長 森 忠彦



編集・発行 公益財団法人 関西文化学術研究都市推進機構
関西文化学術研究都市建設推進協議会
〒619-0237 京都府相楽郡精華町光台1-7
けいはんなプラザ・ラボ棟3階
TEL.0774-95-5105 FAX.0774-95-5104

発行責任者 森 忠彦
ホームページ <https://www.kri.or.jp/>

制作・印刷 株式会社チャンピオンシップス



読者アンケートに
ご協力ください



表紙写真 大阪電気通信大学(四條畷キャンパス)

生駒山系の豊かな自然に囲まれ、大阪平野を一望する高台に広がる大阪電気通信大学 四條畷キャンパス。同キャンパスでは医療やスポーツから、デジタルゲーム、映像・CG分野まで多岐にわたる学びを展開し、実践的な学びを支える本物さながらの模擬手術室や、教育機関最大級のモーションキャプチャーなどを完備しています。また、近年では四條畷市と連携した「仔馬型埴輪」の3Dデータ化や、四條畷警察署との共同による特殊詐欺防止システムの開発など、地域社会との新たなつながりを創出しています。